西光寺だより

第一八七号　令和八年　三月一日発行

冬の終わりと新しい季節の入口を告げる節目である立春が過ぎ、冬と春の境目の季節ですが、まだまだ空気が冷たく寒く感じることであります。まさしく三寒四温。

日本では、三月の呼び名として弥生の他に、花月、花見月、桜月など、多くの花の名が存在し、また年度替りの時期でもあり、月を通して卒業式や送別会が行われ出会いや別れの時を感じることであります。

さまざまな人生の分岐点と花が咲き始める芽吹く思いを感じながら、ゆったりと過ごしたいものであります。

さて二月は短くあっという間に三月であります。

今はさまざまな情報が溢れていることですので、お気づきの方もおられるでしょう、それは二月の日のならびのことであります。

月曜日から日曜日までの全曜日が四回ずつあり、きれいな長方形のカレンダーです。日頃あまり気にしていなかったならびですが、そういえば本当にきれいな長方形。ネットなどでは色々と情報があるみたいですが、だいたい十一年周期でこの形になるようで、最近では二〇一五年、そして次にくるのは二〇三七年です。

日常という時間に、何気に予定などを書き込むカレンダー。その二月のカレンダー見ながら、そおっと気づくこの瞬間に想い馳せることでありました。

浄土真宗本願寺派　白毫山　西光寺
大阪府茨木市西河原一―七―二
電話　〇七二―六二二―四七九四
FAX　〇七二―六二二―九二九一
http://www.osaka-saikouji.net/

●今月のことば●

一月九日～十六日まで親鸞聖人の御正忌報恩講が厳修されました。その時に頂いた冊子から皆さんとご縁いただきたいと思います。

『受け止めきれないものと出会うたび、溢れてやまないのは涙だけ』

米津玄師『Lemon』

私たちは生まれてきたからには、いつか必ず死を迎えなければなりません。出会ったからには、必ず別れを経験しなければなりません。そうしたことは頭では理解していても、実際に受け止められるかといえば、いかがでしょうか。特に、その別れが大切な方とのものであればあるほど、受け止めきれないのが私たちの姿ではないでしょうか。

先日、ある７０代の女性とご法事をご一緒させていただきました。ご主人の七回忌のご法事でした。お勤めとご法話とが終わり、お茶をいただきながらお話をしていると、女性は突然言葉を止められました。そして、涙をこぼしながらご自身の思いを語ってくださいました。

「ダメねぇ。主人が先立ってから六年も経つのに、まだ涙が出てくるの。お友達といる時や孫と電話をしている時は大丈夫なの。でも、夜一人になった時や、こうして主人のことを改めて思い返すと、今でも涙が出てきてしまうの。ダメよねぇ…」

みなさんはいかがでしょうか。似たような思いを抱いておられる方もいらっしゃるかもしれません。

世間では「いつまでも悲しんではダメ」「前向きに生きていかなければいけない」と言われることもあります。たしかに、そのように生きられれば良いのでしょうが、頭でわかっていても思うように生きられないのが私たちの姿です。涙を流しながらしか歩むことができない私たちの姿があります。

しかし、阿弥陀さまは、「いつまでも悲しんではいけません」「強く明るく生きなさい」とおっしゃる方ではありませんでした。
「そんな苦悩を抱えるあなたこそ救わずにはおれない。どんなあなたであっても救い、支えぬく仏と成る」と立ち上がってくださったのが阿弥陀さまです。
大切な方との別れを悲しまずにはおれない私のために、阿弥陀さまは、〝また会える世界〟、別れのない世界であるお浄土を用意くださいました。
お念仏をいただく私たちは、この命終わるとき、阿弥陀さまのおはたらき一つで、懐かしい方々の待つお浄土へ参らせていただく身に、すでに仕上げていただいているのです。仏になる、ねうちのない私が仏にしていただく、ありがたいことです。
苦悩を抱え、涙を流しながらしか歩むことができない私のためにご用意された仏道が浄土真宗です。その浄土真宗をあきらかにしてくださったお方が親鸞さまでありました。心安らぎの中、阿弥陀さまのお心を聞かせていただいたことであります。

≪本願寺派布教使　正親　一宣≫
合　掌

◆三・四月の行事◆

・三　月　二六日（木）
仏教婦人会総会
午前十一時三〇分から正信偈
午後十二時二〇分からお斎
午後一時　～　総会
西光寺本堂

・四　月　八　日（水）
追弔会・春季永代経法要
午後二時・午後七時
西光寺本堂

◎御講師　上田　暁成　師（本願寺派布教使）

※昼はお勤めとご法話、夜はお勤めのみとなります。